オルドス語 英 Ordos, 中 鄂爾多斯土語 (èrduōsītǔyǔ)

中国、内蒙自冶区のオルドス地區に行なわれるモンゴル系言語の1つで、内蒙自冶区を構成する1方言。書記には、内蒙自冶区のモンゴル族に共通する続書きの蒙古文を用いる。

オルドス(鄂爾多斯)は、長城の北に位置し、黄河の大湾曲部に囲まれた地域をさす。古くは、河間、河套とよばれたが、明末に、蒙古のオルドス部が占拠して以来、この名をえた。行政区としては、内蒙自冶区の伊克昭盟がこれにあたる（図参照）。

オルドス語は、多数のモンゴル系諸言語、諸方言の中でも、すでに今世紀前半に、音声的にゆき届いた記述が行なわれ、豊富な言語資料が記録された数少ない口語方言の1つである。その功績は、ひとえに、ベルギー出身のモスタルト(A. Mostaert)に帰せられる。モスタルトは、1906年から1925年まで、南部オルドスのボロ・バルガス(Boro balyasu)にカツ
オルドス語

オルドス語において一様に弱化しており、この点で、オルドス語は、モンゴル系諸言語の中でも特殊な位置を占めている。たとえば、次の例では、オルドス語の場合第2音節の短母音の違いだけで意味が区別されている。

オルドス語  チャハル方言  cf. 蒙古文語

ama 「口」  am ama(n)
amu 「親類」  am amu(n)
ami 「生命」  am ami(n)
am 「平安」  — —

一般に、オルドス語は、第2音節以降の短母音に関して、祖語の特徴をよく反映しているとみなすことができる。ただし、この言語においても、第1音節の短い円唇母音 *o, *o に後続する位置では、非円唇母音 *a, *e が上記の円唇母音に同化する変化（円唇同化）が観察される。

蒙文文語  オルドス語

qola 「遠い」  xolo
olon 「多く」  olon
bülek 「群」  bölök

次に、オルドス語では、チャハル方言等の第1音節の広い円唇母音 o, ö に対して、一連の語で、それぞれ狭い円唇母音 u, ü が対応している。ポッペ（N. Poppe, 1951）によれば、これは、オルドス語において、元来の第1音節の母音 o, ö が、第2音節の狭い円唇母音 u, ü に同化した結果である。

蒙文文語  オルドス語  チャハル方言

modu(n) 「木」  modu mod
yosu(n) 「慣習」  yosu jos
öndür 「高い」  öndür öndöör
ödü(n) 「羽毛」  ödö öd

こうして、他方言の第1音節の o, ö に対応してオルドス語に u, ü がある場合、祖語の第2音節に母音 *u, *ü を推定することが可能となる。この場合にも、オルドス語はモンゴル語における第2音節の母音の推定に重要な証拠を提供している。

このように、モンゴル語を構成している方言が、独自の音変化を介して蒙古祖語と結びついており、系統的に内モンゴル諸方言がひとつに収束する中間的な共通段階をたてることは不可能とせざるをえない。

このほか、オルドス語に目立った音声的特徴としては、チャハル方言等の母音 i, e, ü, ö の前に現われる口蓋摩擦音 x に対して、閉鎖音 k が対応することをあげることができる。

オルドス語  チャハル方言

kélé 「舌, 言葉」  xel
kün 「人」  xuü
ködö 「草原」  xöö
オルドス語

kid 「僧院」 xid
また、名詞語幹末の不定の n は、チャハル方言等と
同様に、主格形では失われているが、語末の鼻音 n と
ŋ の区別は保持されている。

蒙古文語 オルドス語 チャハル方言

tisii(n) 「毛」 tisii üs
on 「年」 on òŋ
ang 「狩」 aŋ aŋ

改めな形態特徴としては、チャハル方言と同様、語頭
の張り子音 (fortis) t, k, tš, x が、第 2 音節前の張
り子音の前で異化して、緩み子音 (lenis) d, g, dz, 
g になっていることである。

蒙古文語 オルドス語 cf. ハルハ・モンゴル語
takiya「鮮」 dakā táxjā
köke 「青い」 gükō xōx
časun(n)「雪」 džasun tsas
qataru「固い」 qatū xatū

この変化は、第 1 音節に長母音、二重母音、子音
m, n, ŋ が含まれる場合には避けられる。

蒙古文語 オルドス語

toyusu(n)「埃」 tōsu
qayiši(n)「銅」 xitiši
qamtu 「一緒に」 xamtu
džengker 「青い」 tšįŋker

[語義・文法] オルドス語の形態の特徴
を挙げると、次のようである。
1) 名詞複数接尾辞の 1 つとして、-ęs という形を
用いる。
例) dojoŋčušu「家畜に対するもの」(dojoŋ
「供物」)
2) 名詞の曲用で、不定の n をもつ名詞は、不定の
n を伴った形が属格形となり、n に終わる名詞は接
尾辞 -1 をとって属格形となる。
不定の n をもつ名詞:

<table>
<thead>
<tr>
<th>格</th>
<th>形態</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>xada「岩が」</td>
<td>xadan「岩の」</td>
</tr>
<tr>
<td>elege「肝臓が」</td>
<td>elegen「肝臓の」</td>
</tr>
<tr>
<td>temē「タクダが」</td>
<td>temēn「タクダの」</td>
</tr>
</tbody>
</table>

子音 n で終わる名詞:
xān「皇帝が」 xāni「皇帝の」
oron「場所が」 oroni「場所の」

3) 連合格の接尾辞 -iä (iē, -iō, -iō) を用いる。
例) basāi「先生」 basāli「先生（と一緒に）

4) 人称代名詞の第 1 人称複数形 bida「我々」の

斜格形語幹が man- となる。
例) mani 「我々の」
mandu 「我々に」

manišu 「我々から」 など。
また、第 2 人称複数形に ta「君たち、あなた方」を用
いる（単数の尊称「あなた」とも用いられる）。
5) 指示代名詞 ene「これ」, tere 「あれ、それ」
の斜格形語幹は、それぞれ enľn-, terľn- である。
6) 動詞活用語尾の中で目立つのは、形動詞 -mār
(-mēr, -mōr, -mōr) と並んで、-ma(-me, -mo, -mō)
〜m が用いられることがある。

例) butšalma xalān usu「渇いているほど茶

条件副動詞の 1 つとして、-ńu(-ńu) のついた形を用
いる。
例) tšige-「そうする」——tšigun「そうすれば」
tšǐ- 「行く」——tšǐn「行くば」
限界副動詞の接尾辞として、-ter(-ter, -tor, -tōr) を
もつ。
例) ūkū-「死ぬ」——ūkütür「死ぬまで」
tšad-「満腹する」——džadtar「満腹するま
で」

【参考文献】
Mostaert, Antoine, “Le dialecte des Mongols
Urdus (sud). Étude phonétique”, *Anthropos*
XXI (1926), XXII (1927)
——— (1937), *Textes oraux ordos, recueillis
e et publiés avec introduction, notes morpho-
logiques, commentaires et glossaire* (Monu-
menta Serica, Monograph series No. 1, Catho-
lic University of Peking, Peip'ing)
——— (1941–44), *Dictionnaire ordos I–III*
(Peking; 2nd edition, 1968, Johnson Reprint,
New York-London)
Street, John C. (1966), “Urdus Phonology: A
Restatement”, *Ural-Altaische Jahrbücher* 38
(Wiesbaden)
Poppe, Nicholas (1951), “Remarks on the vocal-
ism of the second syllable in Mongolian”,
*Harvard Journal of Asiatic Studies* 14
(Cambridge, Mass.)
Orientalistik*, I Abt., V Band, II Abschnitt:
*Mongolistik* (E. J. Brill, Leiden-Köln)

[参照] モンゴル諸語, 内蒙古語
（粟林 均）